

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



**日教組災害対策本部**

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

日教組 岩手県 被災地支援・教育復興ボランティアに参加して

期間 7月27日(水)～7月31日(日)

北海道・静岡・富山・三重の4道県から各4人ずつ(北海道は5人)参加。日教組本部3人

活動場所：岩手県陸前高田市、大船渡市、釜石市の公立学校、各地域

活動内容：児童下校時の付き添いボランティア、図書室内での図書整理、教室整備

#### <はじめに>

三重県より四日市2人、亀山1人、桑名1人の計4人が参加した。

3月11日(金)、私の勤務する学校では地震発生時は6限目の授業時間であった。体育館において子どもたちと共に卒業式の練習をしていた。三重県でも横揺れが長い間続いた。子どもたちは「なんだか船酔いするみたい。ふらふらする。」とはじめ訴えたが、地震だと気づき、しばらく動揺しているようであった。ただならぬ地震が起こったのではないかと感じた。

子どもを下校させた後、テレビを見ると、東北地方において大きな地震がおこり、大きな津波がやってきていることを知り、その事実におそろしさを覚えた。



列車車両に書かれていた  
「つなげよう、日本。」

今回、少しでも被災された方々のお役に立てればと考え参加を願い出た。活動をしていくうちに、この復興活動がけっして被災地のみなさんだけのことではなく、日本の人々がともに支えあって乗り越えていくことにつながっていくと強く感じた。移動中、現地の方から「今は『がんばろう』ということばかり『つながろう、つなげよう』ということばに変わってきている。」という話を聞いた。今こそわたしたちがつながり、継続した支援をしていくことが必要であると感じた。

わたしたちが活動したのは岩手県陸前高田市と大船渡市である。現地では国内だけではなく、世界各地の人々が活動していた。

## 〈作業1、2日目〉

陸前高田市の小学校で活動する。小学校へむかう途中、地元の方より震災時の様子や街の様子を説明していただいた。陸前高田市の市街地の商店は仮設のコンビニエンスストア1軒しか見当たらず、津波の影響が大きいことを実感した。

学校では倉庫にしまっていたオルガンの出庫、図書の整理、支援物資を各学級数で分ける作業をおこなった(作業した日はチョコレートやコップなどが慈善事業団体などから届けられていた)。

子どもたちは体育の時間にプールに入ることを楽しみにしているようであった。プールは神戸市水道局の方が阪神大震災の経験をいかして修繕をしてくださったそうである。

他に「平塚たなばた祭り」で使われた七夕飾り、寄贈された扇風機などが設置されていた。



支援物資の飴を学級の人数分に分ける。  
足りない時は種類をかえて補充します。

休憩時、副校長が3月11日(金)の様子を教えてくださいました。

地震がおきたときは学習途中でした。部屋の中に立ってられないほどの揺れでした。しばらくして津波が襲い、校区の低地部分が津波にのみこまれました。

体育館においても鉄の筋交いがパンと音を立てて割れてしまいました。子どもたちは学校で待機させました。建物内は安全確認が取れないため、すぐには使用できませんでした。今も体育館は使用できず、支援物資の倉庫となっています。地震から5分ほどですぐに電気とガスが止まりました。校庭・校舎には亀裂が入りました。幸い浄化槽は無事で、トイレはプールで水を汲み使用していました。



運動場に飾られた七夕飾り。運動場には  
92棟の仮設住宅が建てられています。

児童は全員無事でした。夜にかけて保護者引渡しが始まりました。大船渡市より子どもの引き取りにむかった保護者は、学校にむかわれるまでの間の街の変化に恐れ、泣き崩れてしまいました。

地震発生時が金曜日であったこともあって、毎週金曜日になるとストレスがかかり不安になったり、大人にかかわりを求めたりする子どもたちもいます。

放課後には、児童下校時の付き添いボランティアをおこなった。農道のようなあまり車が通らない道でも「右、左、右」と高学年が安全確認をおこない、「渡っていいよ。」と声をかけると、小さい子が渡っていた。自主的に安全な登下校ができているようであった。

下校途中には、大阪府警の方も子どもたちのパトロールにあたっていた。災害復興のため道路には工事関係車両やトラックも多く、子どもが行き来するには危険が多いと感じた。子どもたちには、なおつづく余震による津波や車などの危険を少しでも軽減するため、低地を避けた山際に沿った通学路が設定されていた。

下校途中には子どもたちと話す機会があった。

まず1人目は野球チームに所属している少年である。仮設住宅が92棟運動場に建ち、普段の練習はとてもではないができない状態である。「先生のクラスにも野球に夢中になっている子がいるよ。」などと話す嬉しそうであった。

他に5年生の女子児童にも声をかけた。彼女は、別の小学校で被災した。その学校では3階まで津波にのまれたようだ。転校を3回した後、現在の小学校に通うようになった。このように津波にあった子の中には転校を繰り返している場合があるようだ。心のケアも大切であると感じた。



復興支援にはさまざまな人の助けがあって成り立っています。



高田高校の体育館の様子です。津波のすさまじさを感じました。

帰路において、陸前高田市民体育館、陸前高田郵便局、陸前高田市役所、岩手県立高田高校を視察した。市街地はほぼ壊滅状態である。高田高校を近くで見ると、鉄筋コンクリートの建物は筋交いが入っているため、建物は辛うじて原形だけはとどめているものの、津波の影響で手すりが押され、ガラスは割れていた。体育館も天井は斜めに崩れ、内部はぐちゃぐちゃになっていた。コンクリートの外壁は残っていても、天井の電気や内部の備品は破壊されていた。郵便局も建物だけが残し、内部は何もない状態であった。

### <作業3日目>

3日目の作業は、大船渡市内に設置されている災害ボランティアセンターで仕事の依頼を受けた。生年月日、名前等を申込書に書くと、当日の飛び入りでも活動できるようである。宿泊地や食事等は自分で確保しなければならないが、個人でもボランティアに参加できる体制がつけられている。

わたしたちのほか、各地の社会福祉協議会の方、一般の参加者の方とともに、側溝にたまっている泥の除去作業をおこなった。ボランティアがはじまった当初は側溝の蓋あげの道具もほとんどなかったのだが、今では側溝の蓋あげの道具や土のう袋が大量に用意されていて、作業が効率的にできるようになっていた。

午後は大船渡駅前側の側溝の泥除去作業であった。100人程度のボランティアが集まり、作業を行った。側溝からは、携帯電話、茶碗、ガラス、冷蔵庫に入っていた生もの、工具、瓦など、生活があったと感じられるようなものがたくさん出てきた。もともと漁師町で飲食店もたくさんあったようであるが、その様子を見る影もなかった。駅舎は全壊し、線路は破損していた。震災前はたくさんの人々でこの駅前にもぎわったのだろう。津波により生活がまったくちがうものに変えられてしまうことにおそろしさを感じた。



午前中の側溝泥だしの様子です。全国各地から被災地支援をされています。

### <おわりに>

東日本大震災は1000年に1度といわれるほどの未曾有の被害をもたらした。できるものなら震災前の陸前高田や大船渡の姿に戻り、おいしい魚介類や美しい松原のある、笑顔あふれる地域に戻したいと思っているのではないだろうか。

わたしはこの被災地復興ボランティアに参加して、いろいろなことを学ばせていただいたが、ここでは大きく3つのことを記したい。

1つ目は、ずっと被災地に目をむけて、支援していくことの大切さである。3・11から5ヵ月が経った。震災当初に必要なであった支援と現在の支援は状況とともに求められるものが変わっていく。わたしたちが「継続した支援」を行っていくこと。いまこそわたしたちどうしが「つなげ、つながっていくこと」が大切ではないかと感じた。

2つ目は、現地の真実から学んでいくことの大切さに気づいた。子どもたちがまわりの大人を心配させないでおこうと不安なきもちを出さず、「元気な姿」をみせているのは複雑な思いがしたし、テレビの映像では伝えきれない「現実の姿」がみられた。わたしのまわりにも「支援したい」と考えている多くのなかまがいる。いろいろな方が参加して「現実の姿」を感じられるようになればと感じた。

3つ目は、被災地の人々の強さ、やさしさである。想像を絶するほどの体験をしているのだが、実にごんばってみえるのである。訪問先の学校の教職員のみなさんは、自分自身が被災されていて、ご自身の生活が日常のものではないにもかかわらず、子どもたちのために日々奮闘されている。その姿に同じなかまとして頭の下がる思いであったし、自分たちもできること、すべきことを精一杯とりくむことの大切さに気づいた。



下校ボランティア途中、道端にみられた山百合の花。生きていることや命について考えさせられた。

ボランティア活動中にいたるところで「ありがとうございます。ごくろうさまです。」と声をかけられ、恐縮した。このような貴重な体験の機会をいただいた関係各位に感謝したい。